

プレ97の興奮と

84年の中英合意で香港が97年に中国に返還されること
が決まってから中国は開放経済が進展して香港からの中
国投資対中ビジネスは増大した。そういう積極的な対中関
係とは逆に、将来不安からの移民熱や89年の天安門事件な
どもあり、期待と不安が入り交じったまま動いていた。

そして92年、もう97年7月1日へのカウントダウンが
具体的に始まった頃、鄧小平の「南巡講話」と新空港建設
をきっかけに、先行き不安なんてもうええじゃないかと
異常なバブルになった。恒生指数が天井知らずで上がれ
ば、不動産だけでなく、現行の切手も古紙幣も骨董万年筆
も、とにかく抱えているもの全ての価値が上昇したのだ。
ホテルのラウンジには葉巻を売るシガーバーがオーブ
ンし、中華料理屋でボルドーの最高級ワインがのみ下さ
れた。日本からは「再見! 東洋之真珠 ノスタルジック
香港」ツアーが押し寄せ、好景気は続き、怒濤のように返

還を迎えたのだった。

そんな中国香港への最初の来訪者は97年秋のアジア通貨
危機と株暴落だった。香港にとって返還という漠然とした先
行き不安より、この経済の現実是对して明らかかな不安
材料となった。しかし香港政府の積極的な市場介入や香港経
済の生命力で回復を見せた。

問題といえば、「一国二制度」という制度運営について、司法
や言論自由などで多少のギクシャクはあるものの、予想以上
の混乱はないまま、21世紀を迎えた。安定しているのかわい
いのか、不安を抱きながらも、香港はタフだ。

この1月、陳方安生が香港政府の公務員機構の頂点たる政
務官辞任を表明した。返還前の英国統治下から返還後まで活
躍した彼女が引退するのは、返還前後のこの時代を振り返
るいい時期に来た、ということだ。いったいどういいう時代
だったのか、いくつかがこの5年の断片を拾い集めてみよう。

ポスト97の憂鬱

「文」……富柏村
「写真」……南信之



あの異常な熱気と興奮

90年代中葉からのバブル経済、あれは単なるバブルとは何か違っていった。香港はもう、アメリカのバブルも日本のバブルもその高揚から失墜まで全て見ていた。だから同じ過ちを繰り返すのは疎かだ。ただ香港が違っていたのは、この好景気に香港返還という大きなフアクターが絡んでいたことだろう。

とにかく凄い時代だった。まず不動産に火がついた。10年前に80万ドルで購入したマンションが280万ドルになった、数カ月後には350万ドルになった、と「返還後」という不安材料もなんのその。「8年前にカナダに移民するからと、売り急いだ奴が損をした」と不安を逆手にとる言説まで飛び交う。賃貸も契約更改で40%上乗せを要求された、とか、不動産屋に予算を言ったら笑われて端から相手にされなかった、という時代。

そして株式市場。それまでは株価は上昇は小さいものの安定し配当が大きいが評価されていた藍籌が上昇し始めた。数年前、その会社が持ち株会社をパミューダやケイマン諸島に

移した時、どれだけ不安に思ったのか、それをもうすっかり忘れていた。リスクが大きいと敬遠されていた紅籌（中国関連企業株）も注目される。その会社の数年後の経営戦略などどうでもいい。15セントの株が翌日28セントになった時に売り逃げするだけのだから。

なんて面白い世の中なのだろうとみんなが浮かれた。なんでも価値が上がるのだ。普段使ってきた切手、家のどこかで埃にまみれている10セント紙幣、数年前のダービーの外れ馬券まで「皇家」と入っていたので価値が出た。

つい最近まで「酸っぱい」と思っていたワインなのに、ちょっとした中華料理屋にも高級ワインが並び、1本数千ドルのポルドー産が「いい甘み」と称賛される。ワインも寝かせておけば価格が上昇するのだから、余剰資金の運用には便利だった。お洒落なワインバーで柿ピーがつまみなのは笑ったが、気温30度の香港で冷房で冷えた室温14度の室温赤ワインを飲むのも粋だった。

郵政署は毎週のように記念切手を発

売する。返還後に使えなくなるのに長蛇の列である。モンブランの万年筆、ライカの写真機、コーラからカップラーメンまで、返還と一切関係ないアイテムの限定記念品が発売され、そして売り切れる。

返還後、バブルは崩壊し、どん底まで落ちて調整期に入った。政府は積極的に市場介入し、経済はどうか世紀末まで持ち直している。土地価格はいぜん低迷しているが、バブルで高値で購入した連中以外は、もともた持っていた財産が上がって下がっただけなので、とくに大きな火傷はしていない。不動産の家主もあの当時はなぜ二倍の値段で借り手がいたのか、と不思議なだけで、今も92年当時の家賃で貸しているだけである。

ただ、困っているのは、切手なんか興味もないのに切手の一大蒐集を持って余すにわかコレクター、せっかく購入したペトリュスのワインが全然値上がりせず、飲んでみたら「やっぱりワインは酸っぱい」と自覚したワイン愛飲家、それに使わない万年筆を何本も有するプログラマー、そういう人たちなのである。





あの日の天気だけなぜか覚えている

97年7月1日午前6時。大雨。ここ数年のバブルで実は私自身「なんでもキープすれば価値があがる」症候群にかかっていたのかと今になって思うのだが、「この日の」新聞各紙を買い集め

よつと中環へ急いだ。中環への下りのエスカレーターが動きだした時間なのに夜半からの雨でエスカレーターのいくつかは動いてない。ハリウッドロードではエレベーターから滝のように雨水が流れ、その滝壺にブラックタイ姿の西洋人が泥酔して卒倒して中環では大雨の下、いつもの未明のようにオヤジたちが新聞の仕分け作業を続けていた。

前日の午後、総督が総督府を去る頃は、雨もまだ時々パラリと滴るほど。それが黄昏時、タマール広場で英国政府側のフェスティバルが始まると、屋外で雨具なしにはいられないくらいになった。午前零時の返還式典、これが終わって英国の皇太子や総



深夜の返還を待たず、警察署外壁のROYAL HONG KONG POLICEのマークが消された

督がブリタニア号にて香港を出港する頃は不思議と雨は止み小康状態。皇太子や旧総督はデッキから香港の百万ポンドの夜景を楽しめた。

ブリタニア号が香港海域を出るのを待っていたかのように、暗黒の空に漂っていた雲は一気に貯め込んだ雨を落とし始めた。テレビの中継画面では落馬洲のボーダーを越えて人民解放軍が香港に進駐してくる。無言の隊列。きつとトラックや装甲車は高らかにエンジン音の轟音をたて、親中派が組織した「解放軍を歓迎する」市民たちも歓声を上げているのだらう。だがカメラのマイクは「パチパチ……」と大雨の轟音ばかりを拾ってしまい、異様なほど冷徹な光景。

雨は止まなかった。人民解放軍の進駐の途中でテレビのスイッチを切ってベッドに入ったが、雨音が激しくてほとんど眠れず、「朝が遅いと新聞が売り切れるのでは？」と急に不安になり、中環の街に走ったのだ。中環が朝刊の集積地なのでこのへんの新聞屋台は売り出しが早い。殊に陸羽茶室の玄関の新聞屋は何処よりも早く新聞を並べる。「今日の朝刊は値段は倍だな」と雨合羽姿のオヤジが笑った。

一通り新聞を眺めていると雨は弱まった。睡魔が襲う。仮寝。曇天。金

鐘へと歩いていて紅綿路に出た。静寂。普段ならこの「高速」道路は上り下りする自動車がひっきりなしなのに、蠅のように現れた何台かの白バイが拠点拠点で車の流れを止めた。もともと歩行者なんて少ない休日、全ての動きが停止した。そこに坂下にパトカーのサイレンが点灯する。その背後にリムジンの隊列。国家主席のお練りか、とよつやく判った。

黒塗りが過剰なスピード坂上り。車の窓は覆われて、勿論ケネディロードの中国外交部に急ぐ国家首脳たちの顔は拝めない。ただ、主席のリムジンの次車に見た顔がいた。天安門事件の頃から中国外交部のスポークスマン、笑わん殿下の「濃い顔」(傳沈國・現中国常駐国連副代表)だった。金鐘の超高層ビルを見上げる彼の表情はCNNの中継では見たことがないほど豊かだった。この香港が中国に帰帰したことを体感していたのか。

夜、さっきの国家主席は、もう北京の巨大なスタジアムで開催される国家挙げての香港回歸記念式典に臨席していた。嬉しそうな笑み。香港ではビクトリアハーバーに花火があがった。まだ雲が多かったが花火が見えないほどじゃなかった。

翌二日、連休だった。昨日までの悪天候が嘘のように空は晴れ渡っていた。



香港と中国との距離

ここ数年、大きく様変わりしたと実感するのは香港と深の距離感だ。私自身が初めて香港から深に「入った」84年、経済特区の建設開始から5年目。まだ区画整理中のような街並みに明らかに無理して作っているようなビルが建ちはじめているなあという感じだった。罗湖のボーダーを越える人たちも中国側にはテレビや炊飯器といった家電など物資を個人で持ち込むのが目的、その帰りといえば鶏や家鴨、煙草に寝具。その往来が今の二階建ての橋とは違い、1本橋の対面交通で、活気もあるが殺伐とした賑わいだった。行楽というより「田舎の親戚に物資を届ける」空気が濃厚だった。

10年前でも、見た目こそ高層ビルが並ぶ大都市に変貌しつつあったが、出合いの市街に中国中から集まった人たちがなんかギョコチなく暮らしているなあ、という感じで、一歩市街を出れば赤土を掘り起こして造成中、そこにバラックが並んでいた。錦繡中華や世界之窓といったテーマパークも開設ラッシュで、香港市民も「親戚に物資を届ける」から「週末の娯楽」で

深を訪れるようになったのだ。それでも、10年前にその赤土の造成地を眺めた際に、まさか10年後、その場所が、自分が庭付き一戸建ての住宅を購入する宅地になるとは、夢にも思っていなかっただろう。

だいぶ香港と深の距離感は縮まってきたのだが、それでも、香港に戻ると香港人は相対的にホッと安心するよう、罗湖からの鉄道は上水までの間で、罗湖からの鉄道は上水までの間で、この安心感に便乗したスリがかなり発生する。みんな、深は危険だ」と思っていて、香港に戻って緊張感があり緩むのだ。このスリが実は深在住のスリで、香港側に出稼ぎにきてる、という噂すらある。深では香港人のガードが固くて商売にならない、と。

そんなこんないってても、ここ数年は、もはや「週末の娯楽」どころか「日常生活の延長」上に深がある。上水あたりのカーテン屋がもう商売上がったり、と嘆くほど消費が深に移行しているのだ。もはや質の悪いものを安く買うのではない。安いのは昔から。ただ買いに行くのも躊躇していたのが

気軽になった。そして質のいい物を真つ当な値段で深に求めるのだ。

食事も「食は香港に在り」のはずが、最近、香港の名だたる食通家たちが深の料理の水準をほめるように、深は安いばかりか中国各地の料理がその味覚のままに進出している。香港が四川料理といっても麻辣が弱く辣醬チリソースに頼ってしまうような、かなり香港化した四川風なのに対して、深だと成都の百年老店と同じ味が楽しめる、餃子も東北三省の餃子そのもの。

そういった消費の究極が、家を購入した人たち。香港のデベロップによるかなり高級な物件で、いせんは「深は怖い」なんて言っていたのが、強盗はみんな香港に密航してピクトリアピークの豪邸を狙うからか、保安系統の徹底した責

尖鼻嘴の香港側境界は返還前と変わらず、警備は厳重



花豪園（仮称）でゲットできた上流生活をエンジョイしている。更に「街にゴミが落ちてなくてキレイ」と感心するなど深をほめる傾向すら出ている。

深建設を唱えた小平も深が経済特区として発展することは想像に易かったとしても、まさかここまで香港が深に依存、同化してくるとは想像してもいかなかったのでは？と思うのだ、最近。



英語が下手になった？

「香港が中国に返還されてから」と言った。しかし、中国に返還されてから「枕詞のついた言説ほど聞いていて可笑しいものはない。返還前は「返還」は、返還がすでに存在した事実であらう」として、返還前には「返還」は、返還がすでに存在した事実であるから、ということでは本人は確認を

もって力説しているからである。

この言説は、返還前に「香港人以上に」返還後の香港がどうなるか、に興味をもっていただけ、本人には殊に当てはまる。例えば香港の居酒屋とか地下鉄（MTR）で、よく会話の枕詞に「中国に返還されてから」がついているのだ。

だいたい「ネガティブな言説ばかり。英語が通じなくなった、タクシーの運転手の愛想が悪くなった、街のゴミが目立つ、大気汚染がひどい……」といくらでも続く「中国に返還されてから」論。一度でいいから「返還されてから」の肯定的な意見も聞きたいと思うのだが、せいぜい「北京語が通じる」と喜ぶ北京語通か、バスの本数が増えた、という返還と関係ない事象になってしまっただけだ。

実は、はっきり言って「返還で変わったことはない」のではないかとと思う。勿論、香港の司法と全人代による解釈の問題であるとか、中国で邪教とされる団体の香港での活動問題とか、一國二制度を取るにあたっての問題はいくらでもある。しかし、そういう問題は対中関係の問題であって、純粹な香港の問題とは言い難い。司法でも純粹に私ら香港居民がかかわる司法では何ら変化はないし、気功団体も香港での活動だけなら問題はない。

タクシーの運転手は返還の前も後も親切な人は親切、無愛想は無愛想。ゴミは昔から多いし、散らかっているのも、かつて市政局が担当していたゴミ清掃が市政局廃止と業務移行で混乱した事があつたり、大気汚染もバス会社の増発合戦、家用車の増加が理由。返還とは全く関係ないのだ。

こういつた観察での面白い事例が「英語レベルの低下」だ。観察者というものはしばしば自分の立場を見失う。比較文化みたいな怪しい事をするとすぐ陥る点なのだが、実は観察者としての自分も変化していることを忘れていたのだ。観察者自身が、香港に住んで最初は「香港の英語レベル云々」を言う余裕などない緊張とストレスの毎日は、香港英語がわからぬ！と思ってもそれに對するグチより現実的な対応に追われている。それが3年もすれば香港に慣れ、しかも自分も香港英語に慣れ、余裕があるのだ。自分の「香港」英語の聴解力、「香港」英語の会話力がかなり向上しているのだ、相手の英語が低いレベルに思えるわけだ。しかし私たちはそう相対的に観察できてないから、短絡的に「香港の英語レベルは下がった」と思うのだ。



スタンレー基地での人民解放軍によるパレード

「香港が中国に返還されてから」と言った。しかし、中国に返還されてから「枕詞のついた言説ほど聞いていて可笑しいものはない。返還前は「返還」は、返還がすでに存在した事実であるから、ということでは本人は確認を

もって力説しているからである。

この言説は、返還前に「香港人以上に」返還後の香港がどうなるか、に興味をもっていただけ、本人には殊に当てはまる。例えば香港の居酒屋とか地下鉄（MTR）で、よく会話の枕詞に「中国に返還されてから」がついているのだ。

だいたい「ネガティブな言説ばかり。英語が通じなくなった、タクシーの運転手の愛想が悪くなった、街のゴミが目立つ、大気汚染がひどい……」といくらでも続く「中国に返還されてから」論。一度でいいから「返還されてから」の肯定的な意見も聞きたいと思うのだが、せいぜい「北京語が通じる」と喜ぶ北京語通か、バスの本数が増えた、という返還と関係ない事象になってしまっただけだ。

実は、はっきり言って「返還で変わったことはない」のではないかとと思う。勿論、香港の司法と全人代による解釈の問題であるとか、中国で邪教とされる団体の香港での活動問題とか、一國二制度を取るにあたっての問題はいくらでもある。しかし、そういう問題は対中関係の問題であって、純粹な香港の問題とは言い難い。司法でも純粹に私ら香港居民がかかわる司法では何ら変化はないし、気功団体も香港での活動だけなら問題はない。

タクシーの運転手は返還の前も後も親切な人は親切、無愛想は無愛想。ゴミは昔から多いし、散らかっているのも、かつて市政局が担当していたゴミ清掃が市政局廃止と業務移行で混乱した事があつたり、大気汚染もバス会社の増発合戦、家用車の増加が理由。返還とは全く関係ないのだ。

こういつた観察での面白い事例が「英語レベルの低下」だ。観察者というものはしばしば自分の立場を見失う。比較文化みたいな怪しい事をするとすぐ陥る点なのだが、実は観察者としての自分も変化していることを忘れていたのだ。観察者自身が、香港に住んで最初は「香港の英語レベル云々」を言う余裕などない緊張とストレスの毎日は、香港英語がわからぬ！と思ってもそれに對するグチより現実的な対応に追われている。それが3年もすれば香港に慣れ、しかも自分も香港英語に慣れ、余裕があるのだ。自分の「香港」英語の聴解力、「香港」英語の会話力がかなり向上しているのだ、相手の英語が低いレベルに思えるわけだ。しかし私たちはそう相対的に観察できてないから、短絡的に「香港の英語レベルは下がった」と思うのだ。

香港人の知人に「何か変わった？」と聞いてもあまりピンとくる答えがない。返還といっても一朝一夕にクーデターが起きた政変でもなく、少なくとも84年から13年かけて準備されてきた政治機構の変化であつて、その間に香港自身も用意周到となつたばかりか、中国もかなり変化を遂げたわけだ、ましてや、その結果などたかだか数年で変わるようなものはないのだ。何か変わっていくのだから、それは大きな流れで、目に見えるものではない。



バブルから不況へ……それがいい事に思えないか

こうしていろいろ考えてみると、この5年余、返還へのブームでいっきに熱が上昇して、その熱から冷めてみて、思うことは、実は何の大きな変化もなく、香港が住みやすくなった」ということなのだ。失業や大幅なリストラ、ワイン破産にでも遭遇してもいい限り、大多数の市民は不動産価格は92年当時でも収入環境は92年当時より改善されている。

街並みを見ていても同じことを思う。「普通の都会」になってきたのだ。かつて香港バブルが華やかな当時、地代は天井知らずで高騰、それにより商売も相応に高収益な業種だけが街にあふれ、誇張ではなく本当に不動産屋しかないような風景だった。それが香港の地代はぐんと下がり、店主の個性がかなり発揮された本屋や喫茶店、小間物雑貨などの店が出現しはじめた。街を歩いていてかなり楽しくなってきた。

そして香港のような大都市にとって一番大切なことは、「街の活気」である。たんに通行人口が多いだけじゃなくて、街に生活者がいる、ということ。

生活者がいる街はどこか温かな活気があるのだ。

都市は、都市化が進むとまず生活者が追い込まれ、そこに商業やビジネスの街が生まれ、その街が老朽化するとビジネスも市街地を離れ、都市はスラム化する「はず」だ。香港も一時は市街地の都市化がもつと進むはずだったのに、バブル崩壊や旧市街地周辺での急速な都市開発が、「必要以上に」急速に進んだ結果、本来もつと市街中心にあるはずだった巨大ビジネスが、先進のIT環境と安く賃貸料で広いオフィースペースの確保できる周辺地域に移転を始めている。「旧市街が非居住化されるより先にビジネスが都会を出てしまった」のだ。なんとという都市の速度なのだろう、これは。

それによって住民は追い立てられず、街にはまだ生活がある。都市の空洞化は香港にとっては問題になりそうにない。汚いとかウルサイとか悪口はいくらでもいえるが、汚くてもウルサクても人が生活している街の活気は、いくらキレイでも平日昼間の「会社時間」を除けばゴーストタウン化している

都会、繁華街でも住人のいない「通い人」の街より、ずっと素晴らしい。そんな都市で市民生活にも余裕が感じられる。この5年で定着した「らしき」ものの一つがゴルフだ。最近では地下鉄の中でもゴルフバックがかなり目立つ。佐敦や旧空港で打ちっぱなしができるのだ。

そしてワイン。返還前の発泡ワインではない。店員が「これは紅酒」と説明してくれ、面食らったこともあったが、今は違う。豪州の上質の発泡ワインが真つ当な値段で気軽に楽しめるし、ワインセラーの店員はかなり蘊蓄が豊かだ。

バブルが崩壊して不況と、それだけ見るとマイナスである。が、香港は、それまで急速な経済発展で見落とされていた消費文化や生活レベルでの余裕が、このクールダウンのおかげでむしろ活性化している。街かどで、通りに面したカフェで街ゆく人をぼんやり眺めながら珈琲を飲む、そんなもの

都市でもあたりまえのことが、この街にはなかった。通りに面したカフェがなかったのだ。通りに面した場所は「街ゆく人相手にマンションを売る」ばかりだった。それが今、香港はあたりまえの、いい都市の風貌になっている。

「世界で最もエキサイティングなランディング」と評されたカイタク空港も98年に閉鎖

